

## II-5 竹笹堂

記録者の氏名 西荒井希

日時 7/16

場所 竹笹堂

ヒアリングの相手 竹中木版5代目 竹中健司氏

### ヒアリング内容

竹笹堂は入り組んだ路地の中の、雰囲気の良い場所にあった。2階に上がって、まず日本の木版画は水彩絵の具で色を付けること、色が落ちないように「にかわ」という接着剤を使うこと、木版の版木は桜の木を使うことを伺った。木版画は印刷物なので、一気に100枚単位で刷る必要がある。印刷物にズレがあったら仕事にならないので、ぴっちり合わせるために、微調整のための「けんとう」という木の突起物を使う(↓)。一色ずつ刷っている



き、この版画ではチークも入るので、チークもぼかして入れ、最後に黒枠を刷る。版画は大きい

ものだと畳1枚分のももの刷ることがあるが、そのとき版木は70枚くらい、色は1400色くらい使うことになる。

元々は商業印刷物なので、色数が増えればコストがかかる。コストを減らすために色数を押さえた結果、絵が発達し北斎などの有名絵師が多く出た。今でも値段に応じて絵にどれだけ色を入れるかを決めるという。商業印刷を棟方志功が美術品にしていったのが、現在の版画の扱いにつながる。



高級志向のところは機械印刷の10倍の値段がかかっても、木版を使う。機械では刷ったものが全部一緒で、つまらないからだ。同じ理由で、イラストレーターも、味が出るから版画を使う人もいる。このため仕事はなくなることはない。



木版は技術習得が難しく、でき

る人が少ないため希少価値が出るが、希少価値だけでは面白くない、当たり前のように木版が普及するようにしたい、と仰っていた。木版は、今はものが少なくなって希少価値がついて美術品になったけれど、昔は使うもののために作られた。技術を保ちながら必要性のあるもののために作ることが売れるために必要。必要であるものが売れる、必要でないものは必要になるようにする、これが本質だ、という言葉が印象深かった。

### 感想

必要であるものが売れる、必要でないものは必要になるようにすればいい、という言葉がとても印象に残った。他の伝統工芸品にもこの考え方を応用できれば、これからの伝統工芸品の未来は残されるのかもしれないと思う。また、竹笹堂の中に掛けてあった絵が目に留まった。少しずつ違う青色がそれぞれ存在感を持ちながら調和していて、これも版画の良さなのだと思う。



場所 リスン （竹笹堂と同じに日に訪問）

おしゃれな店内で、150種類もの色とりどりの線香（インセンスと呼んでいる）が並んでいた。店内に置かれた配布物には、コンセプトとして香りある生活の提案が掲げられ、インセンスを香りの種類ごとに分類、時間と掛け合わせた表が作られていた。すべての香りを1本ずつから買うことができ、箱売りで香りの種類が限られているという線香のイメージを壊すような売りがされている。単価は税抜き300円からと手に取りやすいが、入っている量を考えればそう安い訳ではない。おしゃれな生活を求める人やギフトにおしゃれなものを贈りたい人向けに売られているのが見受けられ、イメージ戦略が上手いな、と思った。